

平成21年 5月25日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520218
 研究課題名（和文） 戦後スイスの国民統合と言説の共同体—作家たちの未公開ドキュメントを手がかりにして

研究課題名（英文） Integration of the Nation in the post-war Switzerland and Communities of discourse — On the bases of unpublished documents of writers

研究代表者

葉柳 和則 (HAYANAGI KAZUNORI)
 長崎大学・環境科学部・准教授
 研究者番号：70332856

研究成果の概要：

戦後スイスは、ヨーロッパの中央部に位置しながら、第二次世界大戦に関与しなかった「無垢」の国として自らのナショナル・アイデンティティを規定しようとしてきた。このことは、スイスの人口比で約70%を占めるドイツ語圏スイスにおいては、まさにその言語ゆえに重要であった。本研究では、戦後スイスを代表する作家であるマックス・フリッシュの言説の軌跡を、メディアと知識人の作り出す言説の共同体との関連において跡づけることによって、スイスの国民統合の言説戦略と知識人との間の共生と抗争の諸相を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	780,000	4,180,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：出来事、物語、ナショナリズム、スイス

1. 研究開始当初の背景

戦後スイスの作家たちのテキスト生産に関わる政治-文化的な諸要因は、これまでの文学研究においては、ドイツの文学状況とその環境との関連においてのみ言及されることがほとんどであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後スイスの国民統合をめぐるアイデンティティ・ポリティックスの中で知識人の果たした役割を、「作家-メディア-批評家（研究者）」が作り出す言説の共同体

に焦点を当てることによって解明することである。

3. 研究の方法

本研究は、スイスにおける具体的な政治的、文化的な状況の中で、戦後スイスの作家たちが文壇に登場し、ドイツ語圏を代表する知識人として認知され、文学だけではなく、広く政治・文化の領域で影響力を持った活動を為すようになる過程を、上記未公刊・未公開の資料を手がかりにして丹念に辿る。

4. 研究成果

本研究の成果は、8編の論文、1冊の著書、1編の文献データベースの形で公刊された。

これらの成果を通して、戦後スイスの国民統合をめぐる言説空間の中における、マックス・フリッシュの位置の重要性が再確認された。フリッシュの言説が戦後スイスの「正史」との間に軋轢を引き起こしていたことはつとに知られていたが、その消息を未公開の資料も含めた文献の詳細な分析により、具体的に明らかにしたことが本研究の中心的成果である。

フリッシュの言説の軌跡を軸にして、この軸との関係において、常にフリッシュと並び称される劇作家デュレンマットの言説、さらには戦前期にはフリッシュと立場を同じくしていた批評家・チューリヒ大学教授エーミール・シュタイガーの言説などを位置付けることによって、戦後スイスの国民統合をめぐる言説の政治の諸相が明らかになった。その中心的知見は以下のようなものである。

スイスのファシズムを、単純にナチズムのスイス版として捉えることはできない。ナショナリズム的統合表象として、建国時の盟約者団の神話に象徴される「スイスのなもの」の復興が叫ばれ、リュトリの建国伝説とヴィルヘルム・テル伝承が神話化された。この「スイスのなもの」の防衛こそが、フロントの諸派の結節点であった。スイス政府は、1939年3月、スイス文化の保存と振興のためにプロ・ヘルヴェティア財団を設立した。精神的国土防衛は、この財団を中心にして展開された総動員体制型の文化運動である。フェジィ、コロディ、シュタイガーらチューリヒの保守的知識人たちが精神的国土防衛に深く関わっており、NZZのようなメディアがそれと結びつき、選挙運動や、文化闘争を展開していた。この運動の基本的性格は、「ドイツに対して批判的な記事を書く新聞に対する検閲措置」、すなわち、「ドイツにスイス侵攻の口実を与えないこと」、そして「スイスに対して批判的な言説を発表しないこと」という二重の否定に枠づけられていた。

精神的国土防衛が国内の言説を「スイスのなもの」へと向けて再編しつつあった時代、チューリヒ劇場を中心にして、多数の亡命作家から成るもう一つの言説の共同体が形作られていた。反ファシズムと教養市民層に対する批判的スタンスがこの劇場の特徴だった。「亡命者たちにとって、チューリヒ劇場はドイツ語で自由に演じられる唯一の舞台となった」という伝説とは異なり、チューリヒ劇場を中心にした言説の共同体は、それを圍繞する精神的国土防衛を支持する言説の共同体による、無視、批判、検閲といった負のサンクションを受け続けた。

1932年からフリー・ジャーナリストとして活動していたフリッシュが、亡命作家たちと個人的に接触を持ったという記録ない。それどころか、時評 *Ist Kultur eine Privatsache? Grundsätzliches zur Schauspielhausfrage* (1938)では、フリッシュは亡命者文学に対してあからさま排他的な立場を表明している。また、1934年から1943年にかけて、フリッシュの小説がドイツで印刷されている。このことは当時のフリッシュの仕事が、ナチスにとって少なくとも無害なものであったということを示唆している。若きチューリヒ大学教授シュタイガーは、作家としてのフリッシュの仕事を書評に取り上げ、高い評価を与えることによって支援した。このように1944年までのフリッシュは、スイスの国民文学の若き担い手兼ジャーナリストとして将来を囑望される立場にあり、フリッシュ自身も、きわめて特殊スイス的な言説の共同体によって認められたコード体系の中でテキストを生産することで、その期待に答えていたのである。

1944年、チューリヒ劇場の亡命演出家クルト・ヒルシュフェルトが、フリッシュに芝居を書くことを勧め、リハーサルを見に来るよう誘った。1944年にチューリヒ劇場に集う亡命芸術家たちと交流を持ったことがフリッシュの転向のきっかけとなった。転向の経緯に関しては留保の余地はある。だが一つだけ確かなことは、結婚や建築家としての職業生活を通じて、さらには従軍生活を通じて、フリッシュは生の可能性を抑圧する装置としてスイス市民社会を捉え始め、こうした観点からの市民社会に対する批判を『サンタ・クルツ』や『ビン』といった40年代中頃のテキストの中で顕在させつつあったということである。しかしこうした批判は、政治と文学の分離という規範が提供するコードに従っている限り、桎梏としての現実と夢の世界への「逃避」という枠組みの中に閉塞するより他ない。このような前線を表現へともたらずための理論と方法は、コロディ・シュタイガーの共同体にではなく、チューリヒ劇場の中にこそあったのである。

1947年、フリッシュが別様の共同体に参加することを決定づけた二つの出来事があった。一つはブレヒトと出会ったことである。出版メディアとの関係において重要なのは、ペーター・ゾーアカンプとの出会いである。ゾーアカンプはフリッシュの「日記」を出版することに強い興味を示し、これを機にフリッシュは、ゾーアカンプ社と専属契約を交わす。

『日記 1946-1949』の中でフリッシュは、「美的文化」の代表的存在であるシュタイガー、コロディらの芸術規範に対する批判を展開する。美的文化が称揚する「治癒の眠り」が、30年代から終戦までの歴史を忘却したいという欲望と結びついているというフリッシュの認識は、後にドイツにおいて繰り返し問題とされる「克服されざる過去」の抑圧の機制を1948年の時点で明確に捉えていた。

「忘却し、隠蔽してしまいたくなるような悪しき過去を、公共的な場で議論すること」が、その後のフリッシュの全ての仕事を貫く基本テーマとなる。すなわち、別離のような極めて私的な領域における心的抑圧から、集合的な致命的暴力がもたらす災厄に至るまで、生のあらゆる領域において「克服されざる過去」を前景化し、物語と舞台を通して、その克服を目指す試みである。

1950年9月、『日記』が、新設されたゾーアカンプの最初の一冊として出版された。この『日記』の執筆開始から出版までの5年間に、フリッシュの作家としての立ち位置は大きく転換し、精神的国土防衛を支持する言説の共同体から、ゾーアカンプ社に集う批判的知識人の共同体へと活動の場を移していった。さらに精神的国土防衛の性格が変質し、仮想的をナチズムから共産主義へとシフトさせたことが、この転換を際立たせた。国境の外ではドイツ語圏の批判的知識人を代表する存在として認められるようになる一方で、こうした世界的な承認をもたらした仕事が、スイス国境の内側ではフリッシュを、若き国民文学の担い手から、非国民作家へと、精神的国土防衛の加担者から、その攻撃対象へと変貌させたのである。

50年代から60年代にかけて、フリッシュは時評的テキストにおいて、スイスの歴史と現在に対する直接的な批判を展開している。さらに1970年にスイス/人にとっての起源の物語を脱構築する試みである中編小説『学校のためのヴィルヘルム・テル』が出版され、その傾向に変化が生じる。続いて出版された『従軍日誌』Dienstbüchlein (1973)と実質的な遺作となったSchweiz ohne Armee (1989)では1940年の『紙片』の自己引用と再解釈、すなわち精神的=軍事的国土防衛者だった自己に対する批判が展開されている。つまり、ファシズム期のスイス市民社会の体制に、市

民として、かつ、作家として加担した過去に反省的な眼差しを向け、それを繰り返し、自身に、そして「パートナーとしての公共空間」(V, 244)に突きつけることを試みたのである。このように1970年以降のフリッシュの仕事は、ファシズム期のスイスの「克服されざる過去」を抑圧し、中性化しようとする集合的かつ私的な「忘却という癒し」に抗して、それを繰り返し意識化させる作業としてあった。

このような知見は具体的には以下の成果によって生み出された。

<2008年度>

2007年度までの研究成果を、学術論文の形で積極的に公開した。2007年3月にNeue Beiträge zur Germanistikに掲載された研究代表者の論文が「第六回独文学会賞(日本語論文部門)」を受賞した。

マックス・フリッシュに関する一次文献と二次文献の包括的なデータベースの継続的整備と活用を推進した。またこれに関連して、日本独文学会と連絡を取りながら、マックス・フリッシュに関する文献データベース作成とその公開のための作業を行った。文献の収集とデータ入力作業は終了し、現在は文献を通覧することによって、研究動向についての知見をまとめている段階である。その成果のうち研究動向に関するデータベースとそれについての概観はNeue Beiträge zur Germanistikに掲載された。日本におけるフリッシュ研究動向のデータベースは、今年度中に完成し、同じくNeue Beiträge zur Germanistikに掲載されることが決定した。

スイスをフィールドにした研究を、日本における同様のテーマをめぐる研究と結びつけるための、方法論と研究組織の構築した。知識社会学関係の研究者、沖縄、広島、長崎といった地域の記憶の研究者と意見交換を行い、情報交換のネットワークを構築した。

<2007年度>

研究成果をまとめた著書『経験はいかにして表現へともたらされるのか——マックス・フリッシュの「順列の美学」』を出版した。この著書においては、フリッシュの思想と実践が、20世紀のモダニズム美学と戦後スイスのナショナリズムが会う界面において、どのような位置づけを持ちうるのかについて、複数の章において詳論している。

チューリヒのマックス・フリッシュ・アーカイヴ、チューリヒ大学図書館、スイス文学

アーカイヴにて資料調査を行った。30年代のファシズム期にスイスの知識人たちが書いた未公刊ないしアクセス困難な資料、および60年代末のパラダイム転換期におきた文化と政治をめぐる論争資料を体系的に収集した

日本独文学会と連絡を取りながら、マックス・フリッシュに関する文献データベース作成とその公開のための基礎作業を行った。文献の収集とデータ入力作業を終了し、現在は文献を通覧することによって、研究動向についての知見をまとめた。

戦後スイスのナショナリズムについての知見を概説としてまとめ、現代社会学の教科書『入門・グローバル化時代の新しい社会学』（新泉社）に「スイスから見たEU」というタイトルで執筆した。

<2006年度>

2. 2005年度後半、2006年度前半の研究成果が、2編の学術誌に掲載された。また学会発表を1回行った。

フリッシュ・アーカイヴ、デュレンマット・センター、スイス文学アーカイヴ、ズーアカンプ社資料室と連絡を取り、平成19年度に資料調査を行うための口承を行った。

日本独文学会と連絡を取りながら、マックス・フリッシュに関する文献データベース作成とその公開のための方法とスケジュールを調整した。

上で挙げた論文を執筆する中で、基本的な枠組みを確立すると共に、代表者の勤務先の「異文化交流論」の教材として使用する冊子『文化の交流と共生』に、その概要を執筆した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 葉柳和則 : 『一年遅れの返答——「チューリヒ文学論争」におけるデュレンマットの位置——』、『ドイツ文学論攷』、第 50 号、阪神ドイツ文学会、P. 39-58、2008 年 12 月 (掲載決定通知あり)。査読有。
- ② 葉柳和則 : 『「そろそろまた口にしてもいいだろう」——「チューリヒ文学論争」における言説の政治——』、『独文学報』、第 24 号、大阪大学ドイツ文学会、P.199-218、2008 年 11 月。査読有。
- ③ 中村靖子 : 『「歴史叙述の実験室」 M・フリッシュの『テル』が示す「接続法的空間」』、『独文学報』、第 24 号、大阪大学ドイツ文

学会、P.219-244、2008 年 11 月。査読有。

- ④ 葉柳和則 : 『「忘却という癒しに抗して——初期フリッシュと精神的国土防衛——」』、『Neue Beiträge zur Germanistik』、Band. 5、Heft.4、日本独文学会、P.181-206、2007 年 3 月。査読有
- ⑤ Yasuko Namamura: *Der Körper im sprachlich evozierten Zeitraum: Überlegungen zur Metamorphose in Trakls »An den Knaben Elis«*. *Journal of the School of letters (JSL)*. 3. Nagoya University. 3. 2007. P. 49-68. 査読無。
- ⑥ 葉柳和則 : 『死への傾斜、あるいは期待の芸術——初期フリッシュの美学的考想——』、『独文学報』、第 22 号、大阪大学ドイツ文学会、P.5-23、2006 年 11 月。査読有。
- ⑦ 中村靖子 : 『ひとつの性というユートピア——トラークルの詩『少年エーリスに寄す』における魂の追憶』、『名古屋大学文学部研究論集』、文学篇 52、名古屋大学文学部、P.55-85、2006 年 3 月。査読無。
- ⑧ Yasuko Namamura: *Die Sehnsucht nach dem nie gelebten Leben — Die Aufzeichnungen von Anatol Ludwig Stiller und Malte Laurids Brigge*. *Journal of the School of letters (JSL)*. 2 Nagoya University. 3. 2006. P. 49-48. 査読無

[学会発表] (計 1 件)

葉柳和則 : 『システムとその外部 ——あるいはマックス・フリッシュの『ホモ・ファーバー』再読——』、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト「文学・芸術の社会的媒介機能」: 「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」: 「環境と文学部門」、2006 年 3 月。大阪大学

[図書] (計 1 件)

葉柳和則 : 『経験はいかにして表現へともたらされるのか——マックス・フリッシュの「順列の美学」』、鳥影社、計 450 ページ、2008 年 3 月。博士論文 (平成 19 年度・大阪大学) を加筆修正の上出版したもの。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況（計 0 件）

[その他]

1. 文献データベースとその概説

「マックス・フリッシュ」

葉柳和則：『研究文献概観：マックス・フリッシュ』、『Neue Beiträge zur Germanistik』、Band. 7、Heft.2、日本独文学会、P.272-292、2009年3月。

2. 教科書分担執筆

葉柳和則：「スイスから見た EU」 所収：西原和久、保坂稔編：『入門・グローバル化時代の新しい社会学』、新泉社、P.132-135、2007年11月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

葉柳 和則 (HAYANAGI KAZUNORI)
長崎大学・環境科学部・准教授
研究者番号：70332856

(2) 研究分担者

中村 靖子 (NAKAMURA YASUKO)
名古屋大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：70262483

(3) 連携研究者

なし